

五之卷

泉鏡花作

目次

山櫻

女淨瑠璃

なざれの歌

翡翠

「美人だ、そりや口でいふやうなものではない。君なんか西洋人だといふと、一概に何だ、棕櫚の毛のぢれ髪で、脊高の尖ツ鼻の、團栗目とばかり思つてるだらう。まあ、ものは試だ、いえ、何も媒妁を頼まれた譯ではないが、そりや御覽なさい。クラス中の丈の高い奴よりや餘程脊が低くツて、ちつともをかしからず、莞爾する處なんざ、まるで美しい佛様が世話で顯れたといふ佛があるよ。むかうの婦人は太く少く見えるツていへば二十五六でもあらうかな、二十位にツきや見えないけれど、それで先生だからいゝぢやあないか。君むかうの婦人は、人なかへ出て平氣だといふが間違ひだと思ふ。まあ間違ひでないにした處で、こゝはといふ豪傑どもが、總勢七十何人といふ一クラスだもの、可哀さうにいつも眞赤になつてらあな。そりや氣のぼせもするだらうさ。處がね、妙といふのは、あの人数の皆にじろ／＼顔を見られた日にや堪つたもんぢやないけれど、そこはまた能くしたもので。

得て仰ぎ見るものなし、大分皆が俯向くよ。それが其何なんだ、馴れないせもある、多人數なら一々名が覺えられるものでもなし、それに面とむかつて殊更で、むかうも極が惡いかして、其方の方を見て居て顔のぶつかつたものをつかまへちや、

(貴下。) といふので問題を與へるだらう。何うして分る奴はすくないから、問はれてまごつくのを恐れ入つて、いや、不殘傍見よ。

まあ来て見たまへ、君、なか／＼珍さ。此間も何だつた。ミリヤアドが、内から櫻の花を持つて来て、時間に出て、とつきかなかつたか、はじめの内は黙つて、うつむいて、かう、兩手で、胸ン處へ花をあてゝ、頻りに見詰めて居たつてが、其何うもあどけなくツて、美しくツて、品のいゝ趣ツたらなかつたもの、僕はじめ見とれたさ。するとね、何とかいふ、熊の

様な英雄が一人クラスに居る。其に其目がぶつかつたと見えて、

(貴下、何、此色は?)

とつか／＼と寄つて櫻を見せてさ、そして指をさして問うたんだ。わざ／＼内から材料を持つて來た位、腹案があつたらしい。答は英語ですることになつてたんだが、桃色とでも、薄紅とでもいつて欲しかつたものと見える。それにしちやね、君、對手が悪いぢやないか。僕のやうな風雅男を、それ見計らつて聞けばいゝのに。

英雄やゝしばし無言で、口をむぐ／＼とやつて居たつけ、仰山に卓子をたゝいて、

(むゝ、や、やまと魂!) とやつた。わかるまい。

通じないので問返すと、

「やまと魂の色です。其やまと魂

えゝ、ジャバニース

」といひかけて、してやつたといふ顔でにつ

こりして、

(ジャバニース魂のやうな色です。) ツさ、秀句だね。此人にして此答あり。英雄、山櫻と解いたんだ君。

ちつと見當違ひの答案だから、ミリヤアドは妙な顔をして、

(いゝえ、色です。色のこと。)

とやり返すと、英雄居丈だかになつて、

(なあ、諸君。) といふので、號令のやうな聲を出すと、兒分大勢、違ひません、そりや大和魂、大和心です。と疊み

かけて五六人きそひたつていつたもんだから、そこはもう一概に自分の思つてゐることを立通して、

(いゝえ、違ひます。)

(達ひません大和魂!)

(いけません、――大和魂――いけません。)

ときつぱりいつて、つんとむかうを向いたんだ。さあ、堪らない。國家の干城を以て任じてゐる連中だから、恚くいはれて
静まるものか、英雄腕まくりをして、

(何だ、いけない。)

と席を立つて、づいと出ると、ばら／＼と五六人列を亂して立つやつさ。」

(失敬な、大和魂がいけないたあ何だ。)

(詰問しろ／＼。)

ツて、君、なぐりかねない勢で詰懸けるんだもの、ぢいツと見ながらあとずさりをして入口の處で押着けられて、
(御免なさい、御免なさい。) ツて悲しい聲で、君、わびたらうではないか。

やう／＼あの頭を七分三分にキチンと濡らして分けてる色の白い幹事が来て、みんなを取おさへて、やう／＼治めたが、
ミリヤアドがね、廊下を、君、俯いて出て行つたぜ。

もう来やしまいと思つて、僕なんざ、頗る詰らない感情を起して居ると、あくる日もあひかはらず出て来たが、ひどくし
よげて、無用心にや、ものもいひ得ない。もとからちつとふさぎ込む婦人だったが、それ以來はまた格別さ。けれども其故
か、いつそ内氣に、しとやかになつて、ときたま笑顔を見せる時も、何かあはれみを乞ふやうに見える、しをらしくなつた
から、僕なんざ大恐悦。

おかげさまであの學校は男教師の洋服の着こなしなんざこつたものです。どうやら然うみんなで顔を見たり、張る氣だつ
たりするのを見ると、教師とはいふものゝ、何だな、まるで學校のかんばんのやうで、煙草屋の寫真だの、雜誌屋の油繪だ
のと、たいした違ひはないけれど、ありや何だ、思ふに豊でないらしい。其證據にや、それこそ垢のついたもんなんざ、さ
すが着ちや出ないがね、もうちつとも飾ツ氣のない、一色で、手袋だつて、手巾だつて、君、木綿ものを持つてるではない
か。

何時もつツと入つちや直ぐ教場へ出て、濟むとまた直ぐに其教員の溜の前まで行つて、敷居も跨がないで遠くから挨拶をして、其まゝ出て行く、しゞううつむいてるから、しをらしいや。

それに往來を歩行く時だ。他の奴あ、いやに反りやあがつて、見てくれがしに風を切つて通るといふもんだけれど、其は全くだ、實にひかへめで、傍見もしないでさつさと歸る、何か慥う、はにかんでゞも居るやうで、服装が悪いせゐとでもいふのかな。おなじ國の者にでも顔を見られるのが厭な様子さ。

何うしたといふんだらう。何でもあんまり、人づきあひをしないのに違ひはない、一本だちでひどく心細いといった様子だ。

僕なんざ、大に同情を表する一人さ。つい此間も何ね、あまりゆかしい氣がしたんで、門口でやうどあつた時、

(會堂はどちらです。)ツて問うたよ。考へた、だしぬけにお宅はともいへないやね、さうするとあのちよいと顔を赤くして、うつくしい前齒を少し見せて笑つたね、おい、聞いているかい。」

「聞いているよ、何だ、遠まはしに妙な處へ持つて來たぢやあないか。」

「いえ、惡氣なし、聞き給へ。さうすると、其何かいつたが英語だからわからなかつた。が、澄して (いえす) と答へたさ。」

「度胸のいゝもんだ。(氣障だよ、此人は) とでもいやしないか。」

「大きにさ。」

「そこで御本人 (いえす) と答へたはいゝ。」

なざれの歌

時間は適宜なり。東京の繪入新聞二種ばかり読み聞かせたまはむには、其報酬といふをもて、月々の費を給すべしと、ミリアドのいふまゝに、當時渠渠に住ひたる麻布の最寄に下宿して、日毎其許に通ひたり。

上京せし後、ミリアドに逢ひたるは、はじめて都を見たる年の冬、クリスマスの夜なりき。

外國の婦人の名だかくつくしが、洋琴を奏で、わがナザレの歌を唄ふ番相あり。來り見よ、と其折から、予が學資を補助したる林なにがしの男に、山子といふ人、予を誘ひたれば行きぬ。

をさなきものゝ聖書の誦誦、會話など二ツ三ツ濟みし後、洋行がへりの紳士がなせし感話といふもの、あまり長かりしかば、予は暖かき暖爐の傍をば離れて、入口の右手に番人が住める一室に入りたり。皆一堂に會しつゝ、其夜の興象たけななる頃なりしかば、室の片隅に煤けたる笠被せし二分しんの釣らんぶのかゝれるのみ。火鉢の火も消々なりしを、辛うじて莨につけて、つめたき風心地よくつゞけさまにくゆらせし、煙の形おもしろく、むら／＼と低くなびきて、むかうざまに立ちわたる、襖のかけの、うすぐらき柱のなかより、髪、容、あざやかに、うすぐ化粧うたる女の十七八と覺しきが、徐に出で、わが方に進み寄りぬ。

「御免遊ばせ。」

思ひ懸けず、予はすかし見たり。

「あの 誠に申かねましたが、外國人だものですから、それに何でございます、あつちは大勢で、頭痛がしてありませんさうで、少しばかり休まして居りますので、飛んだわがまゝな、申譯もないことですけれど、何卒あしからず、大そうあの、何を、嫌がるんでございます。もう推しつけがましい、申かねますですが、お煙草を、あのちよいと堪忍なす

つて、いえ！ もう此室はかまひません、何誰でも御自由にめしあがります。奈ういたして咎立てをいたすなんて、あなた、飛んでもない、奈ういたしまして。さつきからちよい／＼へお入りなさつちや、皆さんがめしあがりますが、何とも申しはしませんけれど、あんまりお氣毒で私が差出がましくお頼み申すのでございます。皆さんは二三人づれでお入り遊ばすので、私も極りが悪くつて申されませんで、其まんまで見てましたつけが、ついお年もお少し、お一人だもんですからまあ申上げて見ようと存じまして、つい、お肯き下さいまして何うもありがたう存じます。飛んだ地獄ですこと、おほ。

とばかり立あがるを、予はたゞ黙してうなづきたり。

女は其のまゝ彼方に行きぬ。すかし見れば灯の光のいたらぬ隈に、いま一人俯向きて人立てりし、と見るとき其もの歩を運びて、上靴の音なづるやうに近づきながら、

「すみません。」と正しくいひたり。思はず立ちて、

「ミリヤアド！」とばかり進み寄りぬ。ミリヤアドは一足すさりて、ちつと此方を見詰めいき。

しばしありて、来て、うつくしき手をのべつ。

予が措はわなゝきぬ。あはれ此上手のかなづるよ。山子の「なざれの歌」には過ぎたり。

ミリヤアドは深くもの思ふ目に此方を見て、眉宇の間に心を籠めつゝ、

「何故」

と早や詰り出でたり。頓に應ぜむすべあらで、しばらく顔を見合へる折しも、ハタノと手を拍つ音。紳士が感話果てつと思ふに、忽ち戸の外にあわたゞしき聲音して、山子は急ぎ来て、

「それでは唯今、ちやうど人も揃ひました。君來たまへ。ミリヤアドお早く。」
と何かしきりに急き居れり。

ミリヤアドは無言なりしが、そのまゝ手袋を脱ぎて打揃へ、衣兜にいれて立直りぬ。

傍より、

「唯今。」

「來たまへ、君。」

といひあへず、山子はいそ／＼として出て行きぬ。ミリヤアドの予を見返るを、女は互に顔を見て、

「まあ、あとでおゆつくりおはなしなさいまし、待つてるでせう、あなた。」

うなづくと、やがて出で、あまたの來客と女學生の多人數が二ならび椅子にかゝれるなかを、肅然として横ぎりぬ。其の横ぎる時、わきめもふらで、さら／＼とさばくとて、右に、左にひだうつ裳の、泥まみれなる人の靴さきに觸るゝもいはで、たをやかなる身をやゝ横ざまに、せまき人なかをすりぬけつゝ、祭壇の傍に据ゑたりける洋琴に打むかふより、直にうたひはじめたり。

衆はみな耳を澄せり。

山子がてら／＼とぬれ色見せし天窓の髪、ていねいに撫附けたるが、音調の一抑一揚、光澤をおびて、七分三分にあなたこなたに動いて見ゆ。

曲は讚美歌、九十の譜、歌こそは星月夜の、ナザレに於ける羊かひを七五の調にてうたひしものなれ。予はしば／＼山子の口より讀きかされ、其拙なさをば諳じたり。

ミリヤアドが聲の清らかなると、あまりに其しらべの妙なるとに、予は人ごとのそれながら、うら恥かしくもまたあはれるに、全くは聞くに堪へず、歌ははまだ半ばなるに、座を立ちて、再び番人の室に忍び入りぬ。

耳は蔽ひたれど、聲の透れば、なほさわやかにぞきこえける。かなではてつ。喝采の聲哄と起りて、かなたには鳴りもやまざるに、ミリヤアドのいたくつかれし姿は、疾く戸口に歸り來れり。女はハタとあとをば鎖しぬ。

「まあ、ようございました。」

ミリヤアドはとききをつきて、衣兜より手袋を取り出し片手をはめながら予を見たり。

予はそのつかれしさま見ゆるが悲しかりき。慰めんとて微笑みて、

「あんな長いのを、よく覚えました。」

「え、二月かゝりました、私頭痛がして、気分が悪い。よく覚えられませんで、ことわつたの。けれども神様につかへる務だといつて、堪忍しません。私どうしても覚えられないで、あやまりましたけれども肯きません。頭痛がしました酷うございました。あたまが重くツて起きられない。無理に勉強して覚えしました。上杉さん、恥かしい、あなたは覚えがよくなつたでせう。」

と、しみ／＼といひてまたといきせり。

予はおもはず憤然として、

「あんな、つまらないものを。」

「え。」

「何です！ 子守唄にもなりやしない。」

いひ放てる胸はすが／＼しくなりぬ。

女は横をむきて手を其面にあてたり。

ミリヤアドは目をニりて、さわがしきかなたをキツと見たるが、ぴりりと手袋を裂いてすてゝ、

「私は洋琴を十年。」

とて身をふるはして忍び泣きぬ。

やがて端然と姿を正して、

「帰りませう。一緒に、直ぐ、上杉さん。こんな、こんな教會、私は最初から嫌だつたの、日本のおもだちがみんな勤めます。きかないと、もうともだちでないといひますから、寂しいから参りました。あんな歌、それでもみんな立派な歌だといつてだましました。口惜しいこと、そんなものにははせるため音楽は習はないのを、みんなで、私をなぶつたの。まづい歌、悪い人、もう友達になつていりません、高津さん。」

と女を見て、

「おいで！ 帰りませう、上杉さん、さ。」

と風采凜として、氣色ばみたる面けだかう、戸を出づると入り違ひに、山子はものをかゝへて、であひがしら、うれしげに立迎へ、

「よく、忘れないで。結構、贈物をみんなに分けました。貴女の分、番です。はゝゝゝ、うつくしうございますな、誰が贈りましたか知らん。」

と上機嫌の笑ひ高く、一雙の翡翠の剥製なるを、見よがしに、いミリアアの胸のあたりに差寄せて、
「ね、翡翠、翡翠の贈物。」

といふ聲やまず。ミリアアはおもてを赤めて、手強く拂ひ退けたれば、渡さむとして手の弛める、籠はハタと床に落ちぬ。

翡翠の位置も、山子の顔色も、満場の光景も、ミリアアがひややかに戸を出づる時みな變れり。變らざるはたゞ電燈の光と、つややかなる山子が天窓の髪分けめとのみ、相てらして依然たりき。

少年の情の激したる、何の考ふこともなく、山子をば見も返らで、予は直ちにともなはれて、ミリアアの家ゆきぬ。

【五之卷・完】